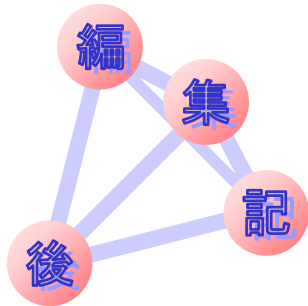


今年度からは17組の強力な助っ人(公募研究)が加われ、6月には全体会議が開催されました。また、関東、関西では月例のセミナーもスタートし、川村特定は今後ますます活性化いくものと期待されます。そんな折のニューズレター第三号発行の運びとなりました。



さて、物性科学は通常スモールサイエンスとして分類されていますが、最近はビッグサイエンスとしての意味合いが増してきています。1つには、加速器などの大規模施設の貢献があります。J-PARCは今年5月に最初の中性子発生に成功したばかりですが、川村特定終了までにはフラストレート物理に関する大きな成果が挙げられているのではないのでしょうか。もう1つのビッグサイエンスとしての側面は、グローバルCOE、世界研究拠点などに象徴される予算の肥大化です。業界を束ねた、なにかとてつもない

崇高な目標に対してどかんとお金をつけるやり方には賛否両論あるかもしれませんが、それはともかく、個人的には成功はリーダー次第だと思っています。以前、斉藤軍治先生(現名城大教授)をリーダーとするCOEプロジェクトに関わったことがあります。人と人、分野と分野の新しい交流を精力的に推進されたので、特に若い人には刺激的で、私もそれなりに新しいことをスタートできました。



三角探しの旅。スイス・リギルム(ヨーロッパ山岳観光の走りとのこと)の三角点、右は京大iCeMSの○野先生。(念のため、会議は山岳ホテルでありました。)

特定領域研究は、研究の目的は明確ですが、ややもすると単なる仲良し集団の組織になりかねないといわれています。しかし、本特定はその心配は無用でしょう。これは本特定が採用される前のことですが、川村代表から「私は研究に関して一匹狼である」といった類いのことを聞きました、これはカイラリティなど先駆的な理論を創られた代表ならではのお言葉ですが、研究上の変なしがらみがないのでリーダーシップをとるにあたり公平で、思い切って物事がいえるのではないかと勝手ながら想像しています。そんな代表の熱意に純粋に応えたいといった気持ちは皆さんもお持ちかもしれません。

陰山 洋

特定領域研究「フラストレーションが創る新しい物性」

ニューズレター Vol.3

2008年8月発行

発行者	川村 光 (大阪大学 大学院理学研究科)
編集担当	有馬 孝尚 (東北大学 多元物質科学研究所)
	陰山 洋 (京都大学 大学院理学研究科)
編集協力	宮寄 史枝 (大阪大学 大学院理学研究科)